

## 現実のパラフレーズ

－『さようなら、ギャングたち』の挿話的な構造－

カレル大学 大学院生

イゴル・チマ

高橋源一郎の「さようなら、ギャングたち」という小説は日本のポストモダン文学の代表作の一つである。この小説は、伝統的な語り方や言葉遣いや文学思想に動揺を与え、超越的で実験的なナラティブとして知られている。高橋氏のテキストは、線のナラティブの構造を破壊し、多面的で挿話的な構造をもち、果たしてこれは小説であるのかということまで議論されるほど、文学作品の構造理論に数えきれないほどの議論をもたらしている。特に、その小説の一つ一つの挿話の間には、一目では見えない何か深淵な関係があるのか、それとも偶然に並んでいるだけであるのかという問題がある。

本発表では、「さようなら、ギャングたち」における虚構世界の構造に着目する。本作品では、虚構世界が現実の世界のパラフレーズとして扱われており、現実の世界で存在している物事や文学作品や歴史上の人物などが驚くべきコンテキストに登場することによって、新しい意味やコンテキストが生み出されているのである。特に虚構世界論を通じて、「さようなら、ギャングたち」の虚構世界の深淵構造と意味的な一貫性を考察し、分析を試みる。